

調べのない賛美

～八木重吉～

賛美の礼拝
2008/3/30

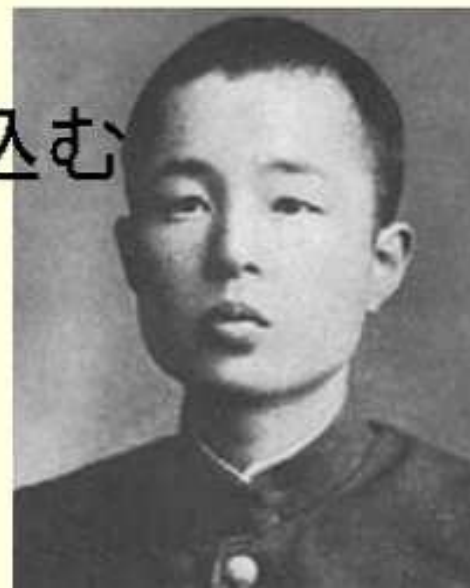
素朴な琴

このあかるさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐へかね
琴はしづかに鳴りいだすだろう

<八木重吉「貧しき信徒」>

クリスチャン詩人、八木重吉

- 1898年～1927年(享年29才)
- 東京府南多摩郡堺村(現在の町田市)に生まれる
- 神奈川県師範学校を卒業後、英語教師に
- 師範学校在学中に教会に通い始め、1919年、駒込基督会において受洗
- 1921年頃から詩を作り始める
- 1922年に結婚。詩作に精力的に打ち込む
 - 23年には半年で十数冊の詩集を編む
- 1925年『秋の瞳』を刊行



クリスチャン詩人、八木重吉

- 1926年結核と診断され、茅ヶ崎で療養生活に
- 病臥の中で第2詩集『貧しき信徒』を制作したものの出版物を見ることなく29才で召天
- 5年余りの短い詩作生活で2000を超える詩を編む
- 2人の子どもたちも重吉の死後結核で夭逝
- 戦後、クリスチャン詩人として再評価され、82年、88年に全集が上梓された
- 熱心なクリスチャンで、自分の詩は「必ずひとつひとつ十字架を背負ふてゐる」と主張する

「八木重吉によせて」三浦綾子

- 「青春時代、私は長い療養生活を送った。そんな中で、来る日も来る日も八木重吉の詩を読んだ。そこには、たとえようもない柔らかい魂と、透明ともいえる感受性と、強い信仰があった。悲しむ者の涙を拭い、うなだれる者に希望を示し、闇路を迷う者に一条の光を与えた。

八木重吉の詩は、私にとって聖書にも似た存在であった。それはキリストを指し示す詩であったからだ。今も、八木重吉の名を聞くと、私の心は言い知れぬ平安を覚える。八木重吉とはそういう詩人なのだ。」

八木重吉の詩＜自然＞

■ 花がふってくると思う

花がふってくると思う

花がふってくるとおもう

この てのひらにうけとろうとおもう

■ 光

ひかりとあそびたい

わらったり

哭(な)いたり

つきとばしあったりしてあそびたい

八木重吉の詩＜自然＞

■ 冬日(ふゆび)

冬の日はいすいけれど 明るく
涙も出なくなってしまった私をいたわってくれる

■ 太陽

太陽をひとつふとところにいれてみたい
てのひらにのせてみたり
ころがしてみたり
腹がたったら投げつけたりしたい
まらなくなつて
あかなくなつて落ちてゆくのをみてゐたら
太陽がひとつほしくなつた

八木重吉の詩 <家族>

■ 母をおもう

けしきが

あかるくなってきた

母をつれて

てくてくあるきたくなった

母はきっと

重吉よ重吉よといくどもはなしかけ

るだろう

八木重吉の詩 <家族>

■ 朝飯

一日中ひびだらけの手で働きつめる
うつくしい顔をして眠っている妻を
起す気になれず
まだ快(よ)くなりきらないが
私がそっと起きて朝飯をたいた

八木重吉の詩 <家族>

■ 桃子よ

もも子よ

おまえがぐずってしかたないとき

わたしはおまえに げんこつをくれる

だが 桃子

お父さんの命が要るときがあったら

いつでもおまえにあげる



八木重吉の詩 <人生>

■ 雨

雨のおとがきこえる

雨がふっていたのだ

あのおとのようにそっと世のためにはたらいていよう

雨があがるようにしずかに死んでゆこう

■ 悲しみ

かなしみと

わたしと

足をからませて たどたととゆく

八木重吉の詩 <願い>

私は
基督(きりすと)の奇蹟をみんな詩にうたいたい
い
マグダラのマリアが
貴い油を彼の足にぬったことをうたいたい
出来ることなら
基督の一生をカー杯詩にうたいたい
そして
私の詩がいけないとこなされても
一人でも多く基督について考える人が出来た

八木重吉の詩＜信仰＞

■ きりすとおもいたい

きりすとおもいたい
いっぽんの木のようにおもいたい
ながれのようにおもいたい

■ 信仰

からだが少しでもいいと
基督を忘れてしまう
今だ たった今だ
からだが悪いときに信じ切れぬなら
いつになって信じきれるものか

八木重吉の詩 <聖書>

この聖書(よいほん)のことばを
うちがわからみいりたいものだ
ひとつひとつのことばを
わたしのからだの手や足や
鼻や耳やそして眼のようにかんじたいものだ
ことばのうちがわへはいりこみたい

八木重吉の詩

■ 解決

基督が解決しておいてくれたのです
ただ彼の中にはいればいい
彼につれられてゆけばいい

■ 仕事

信ずること
キリストの名を呼ぶこと
人をゆるし 出来るかぎり愛すること
それを私の一番よい仕事としたい

八木重吉の詩<イエス>

イエスの名を呼びつめよう
入る息 出る息ごとに呼びつづけよう
怒どおりがわいたら

イエスの名で溶かそう
弱くなったら
イエスの名でもりあがって強くなろう
きたなくなったら

イエスの名できれいになろう
死のかけをみたら
イエスを呼んで生きかえろう

マタイによる福音書5章8節

心の清い人々は

幸いである

その人たちは神を見る。